

## 国境なき子どもたちパネル順番表

整理番号	国名	タイトル
01	カンボジア	ストリートチルドレン
02	カンボジア	『若者の家・バッタバン』
03	カンボジア	『ビルディング・トゥギャザー』
04	カンボジア	職業訓練
05	カンボジア	教育支援
06	カンボジア	法に抵触した青少年への支援
07	フィリピン	ストリートチルドレン
08	フィリピン	シンナーを吸う子どもたち
09	フィリピン	『スモーカー・マウンテン』
10	フィリピン	『若者の家』
11	ベトナム	『若者の家』の女子たち
12	インド	『KnKホーム』プロジェクト
13	インドネシア	スマトラ沖津波被災地
14	インドネシア	ジャワ島中部地震被災地
15	インドネシア	『チルドレンセンター』
16	インドネシア	教育プロジェクト
17	パキスタン	震災の傷跡
18	パキスタン	復興は進まず
19	パキスタン	『ニュー・ホープ・アカデミー』
20	東ティモール	『ユース・センター』
21	東ティモール	ユース・プログラム
22	東ティモール	スポーツ・プログラム
23		教育啓発活動『友情のレポーター』
24		友情の5円玉キャンペーン
25		国境なき子どもたち(KnK)とは

## カンボジア ストリートチルドレン



ストリートチルドレンの多くは、文字通り眠るところもない。孤児や人身売買、性的虐待の被害であることもある。国境なき子どもたちは、彼らのための自立支援施設「若者の家」に代表されるプロジェクトをカンボジアで数多く実施している。

## カンボジア『若者の家・バタンバン』



もとストリートチルドレンや孤児、人身売買や性的虐待の被害にあった青少年のための自立支援施設『若者の家・バタンバン』は、他のNGOが運営する保護施設での受け入れが年齢的に難しい15歳以上を主な対象として受け入れている。

## カンボジア 『ビルディング・トゥギャザー』

- 施設(バタンパン)での職業訓練実施により、若者に職業訓練の機会を提供する
- 施設を現地の人々へ積極的に開放し、周辺地域の人々の問題意識と理解の向上を促進する
- 国を超えた若者の交流や同窓会の拠点として卒業生の主体的な利用を促す



絹織物ワークショップ  
 若者の家に暮らす女子だけでなく、地域の貧困層の女性も対象としている。参加者は1年後、ひと通りの織り方を習得し、絹織物の生産に従事する予定である。

## カンボジア 職業訓練



子どもたちはソーシャルワーカーのアドバイスを受けながら自発的に訓練を選択しており、男子は車塗装、車修理、溶接、理髪、絵画を、女子は美容、絹織物、絵画を学んでいる。卒業生が転職・独立・起業する際には、必要に応じたフォローもしている。



『若者の家・バタンバン』では子どもたちのほぼ全員が公立学校または職業訓練に通っている。平日午後からは施設内で識字教室を開いており、学校の補習目的のみならず、社会生活や仕事をす



2003年1月よりバタンバン州刑務所において未成年収監者に対する教育活動を、2004年からは職業訓練と出所前後のサポートをそれぞれ開始した。

2006年6月にはバタンバン州に隣接するバンテアイミンチエイ刑務所内での教育活動も開始している。未成年収監者の多くが勾留中の身であることから、早期の裁判実施支援の必要性が高まっている。写真は、バタンバン刑務所内での女子向け裁縫のコース。

## フィリピン ストリートチルドレン



スラム地域での一般家庭の平均的な子ども数は6~12人とされ、定期的な収入がないためネグレクト（育児放棄）の被害にあったり、学校に通えずストリートチルドレンになる子どもが多く存在している。ストリートチルドレンは、路上で生きるか死ぬかの日々を送る。

KnKは、社会の枠組みから外れてしまった子どもたちが、安定した衣食住と教育の機会を得ることで、一般市民として地域社会に戻るよう力を尽くしている。



## フィリピン シンナーを吸う子どもたち



マニラ首都圏でカオオカン市はストリートチルドレンの数が3番目に多く、統計上、12,860人とされている。こうした子どもたちは物乞いやゴミ集めなどをして生計を立てるかたわら、空腹をまぎらわせる為、シンナーや違法薬物に手を染めていることが多い。

## フィリピン『スモーカー・マウンテン』



巨大なゴミ山(スモーカー・マウンテン)が存在するパヤタスは、環境問題・人的問題を抱えるスラム地域である。法的に14歳未満はゴミ山で働くことが禁止されているが、家計を支えるため学校に通わずゴミ山で働く未成年者が多い。

## フィリピン『若者の家』



『若者の家』は、未成年受刑者、事情により家庭に戻れない子どもやストリートチルドレンを保護し、家庭的な環境を提供することを目的として運営されている。専門のソーシャルワーカーが定期的にカウンセリングを行い、自立できるようケアをしている。

## ベトナム『若者の家』の女子たち



ベトナムでは15歳以下の子どもを就業させることが禁止されているが、児童労働の実態は目に見えてそれに反している。特に女子の場合、雇用主による虐待の被害にあったり、売春を強要されたりする危険性も高い。「若者の家」では共同生活により保護された女子たちへの精神的なケア及び教育や職業訓練の機会を提供している。

## インド『KnKホーム』プロジェクト

インドでは、2004年12月26日のスマトラ沖津波により、南東部の海岸地域において約17,000名が犠牲となった。ヴィランガニ村では、津波発生がクリスマスの翌日であったこともあり、多くの命が失われた。



KnKは現地NGOとの協力で、ヴィランガニ地域で被災した子どもたちのための家『KnKホーム』を開設し、現地の避難所に保護されていた孤児50名ほどを中心に受け入れた。子どもたちの生活環境は複雑で津波前から家庭に問題がある子どもも多く、津波で追い討ちをかけた状況に追い込まれてしまった。KnKホームは24時間体制で運営し、様々な機会を提供すると共に、ソーシャルワーカー等の愛情とケアのもと精神的なリハビリを行っている。

## インドネシア スマトラ沖津波被災地



2004年12月26日、M9の大地震がスマトラ島沖で発生、巨大な津波がアジアを中心に襲った。死者、行方不明者は23万人を超え、過去に類を見ないほどの大きな被害をもたらした。最も被害が大きかったインドネシアでは、被災者の3分の1が未成年者だといわれている。

## インドネシア ジャワ島中部地震被災地



2004年12月末に発生したスマトラ島地震・津波の被害を最も受けた国として注目を浴びたインドネシアであったが、2006年5月27日に発生したジャワ島中部地震によって再び大きな被害を受けた。国境なき子どもたちの活動対象地域となっているエリアにおいては、家屋の倒壊率が95%を超えた。学校施設も大きな被害を受け、子どもたちは緊急時用の簡易的な校舎で勉強をしいられていた。

## インドネシア『チルドレンセンター』



インドネシアの子どもたちが安心してすごせる場となるようなチルドレンセンターを運営し、彼らが精神面での安定を取り戻すことができるよう日々活動している。

## インドネシア 教育プロジェクト



教育プロジェクトのひとつであるビデオワークショップでは、ビデオカメラの使い方を学びながら、同時に参加する青少年の心理的ケアに繋がる自己表現をすることを目的としている。2004年以降、カンボジア、インドネシア、インドにおいて実施している。



©Mika TANIMOTO

震災後1年が経過しても、政府の具体策の遅れから立ち入り禁止区域指定が解除されず故郷へ戻れないまま、今もテントやシェルターでの厳しい避難生活を余儀なくされている人々も多い。完全な復興までには最低でも10年はかかるといわれている。

パキスタン 震災の傷跡



2005年10月8日に発生したパキスタン北部地震は、建国以来最大規模の人的・物的被害をもたらした。

地震が発生した時刻が朝8時台であったため、多くの児童・生徒が崩壊した校舎の下敷きになるなどして命を落とした。親兄弟や友人を失った子どもたちの心理的ショックの長期化が危惧された。

KnKは現地NGOと協力して震災した子どもたちへの心理的ケアに重点を置いた教育施設を3校開設した。

また、避難キャンプが遠隔地にあるために日々の通学が困難である生徒の宿泊施設としてナイトケアセンターを開設し、子どもたちが集中して勉学に励むことのできる環境を確保すると同時に、保護者にも生活再建に全力を注げるように配慮した。



# パキスタン『ニュー・ホープ・アカデミー』



『ニュー・ホープ(新たな希望)アカデミー』と名づけられたこのプロジェクトは、震災で被災した子どもたちへの継続した教育機会の提供と、震災で受けた心理的ショックからの回復を主眼としてスタートした。

2006年12月末現在、計313名の子どもたちが学んでいる。質の高い教育という目標に鑑み、教員あたりの生徒数を考慮し、きめの細かいケアが行き届くように配慮した。



©Mika TANIMOTO



©Mika TANIMOTO

震災後は笑顔もなく、余震のたびに泣き叫ぶなどの行動が目立つ子どもも多く見られたが、現在ではどの子どもも自然な笑顔で学校生活を楽しむ姿が見られる。

サタンガリ地域は震災前より最貧困層が集まる地域であり多くの子どもが学校へ行けずに労働に従事するなどしているが、開校後は地域における教育の重要性の認識が高まり、就学率の上昇がみられた。

# 東ティモール『ユース・センター』



©Atsushi SHIRIYA

暴動によって最も甚大な被害をこうむった地域の一つである首都ディリ市内のコモロ地区において、knkは地域の青少年たちに様々な活動や学習の機会を提供するためのユースセンターを運営している。



©Atsushi SHIBUYA

ケアセンターの活動は住民や指導者層からの深い理解と賛同を強く得ているが、Knkの活動には依然、様々な問題が根強く残っており、青少年たちの心のケアをいかに行っていくかが重要な課題となっている。

東ティモール スポーツ・プログラム



©Atsushi SHIBUYA

2006年4月から6月にかけての騒乱によって、最も甚大な被害を被ったティリ市内コモロ地区に唯一ある『ユース・センター』では、各種プログラムを専属のコーチが丁寧に指導し、月1回大規模なスポーツトーナメントを開催している。

きょういくけいはつかつどう ゆうじょう  
**教育啓発活動『友情のレポーター』**

日本の青少年に向けた国際協力のための教育啓発活動として、国境なき子どもたち主催『友情のレポーター』プログラムを実施している。1995年の開始以来、日本の青少年とアジアの青少年との相互理解と友情の促進に努めている。



現地の人々と交流、取材することで、より深く理解し考えることができる。友情のレポーターが会った子どもたちの現状に関するビデオレポートは、日本の学校教育機関での教材として広く活用されている。

ゆうじょう  
**友情の5円玉キャンペーン**



YUJO NO GO EN! DANA CAMPAIGN

◆5円玉でできる国際協力があります◆  
 5円玉は『ご縁』につながるという発想のもと、5円玉の募金でアジアの恵まれない子どもたちを支援する、主に小中高校生向けの国際協力プログラムです。



◆子ども一人当たりにかかる費用の目安◆

しよくひ	ひとり あ	ひよう	めやす
食費	: 1日	170円	がっこうきょういくひ
しよくぎょうくんれんひ	: 1日	50円	学校教育費
職業訓練費	: 1日	35円	被服費

## こっきょう 国境なき子どもたち (KnK) とは

アジアの開発途上にある国々のストリートチルドレンをはじめとする恵まれない子どもや、大規模自然災害や騒乱の被害にあっている子どもを支援する非営利団体(NPO)です。各国の恵まれない青少年と日本の青少年が互いの理解を深め、共に成長していくことを目的に1997年に設立されました。

路上で寝泊りしたり労働に従事させられ学校に通えずにいる、そんな子どもたちの苦しむ姿を減らすために私たちには何ができるでしょうか。

国境なき子どもたち (KnK) は、彼らが教育・訓練の機会を得て真の自立を果たすことで、次の世代に生まれてくる彼らの子どもたちを生活苦ゆえの路上暮らしや人身売買といった悲劇から救うことを目指しています。

KnKは、アジアでの援助活動と平行して、日本の人々に世界の子ども達の現状に関する学習の機会を提供することで、日本と諸外国の青少年が「共に成長していく」ことを目指しています。

日本の若い世代の人々が友情のレポーターや現地派遣ボランティアなど様々な形でKnKの海外プロジェクトに参加し、その現状を日本の人々に伝える役割を担っています。